FD NEWS
CHUKYO UNIVERSITY
For Doing our best!
2019.10.1 No.18

[特集]アクティブ・ラーニング

中京大学のFDとは

FDとは、授業内容・方法や広く大学の教育に係る活動を改善し向上させるための組織的な取り組み(Faculty Development)のことを意味します。中京大学では、FDを"大学のすべての者の幸せのため"と位置づけ、それを目指して学生・教員・職員(三者)がベストを尽くすもの(For Doing our best)ととらえています。

CONTENTS

[特集]アクティブ・ラーニング
- アクティブ・ラーニングとは …… 2・3
- アイスブレイク、アクティブ・ラーニング、発問技法 …… 4・5
- アクティブ・ラーニングについて学ぼう …… 6
- アクティブ・ラーニング推進に向けた取り組み …… 7
- 授業改善のためのアンケート結果 …… 8

特集

アクティブ・ラーニング

本学が教育改革の柱の一つとしてアクティブ・ラーニングを推進しています。そのことが端的に示されたのが、教育質保証会議（議長:安村学長）から出された通知文書**「中京大学におけるアクティブ・ラーニングの推進について」**（2019年4月3日）です。特集号の冒頭に、この通知に沿って、アクティブ・ラーニングを推進する意義についてふれたいと思います。

アクティブ・ラーニング推進の目的

みなさんは全学および各学部の学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を確認されていますか。ディプロマ・ポリシーに掲げる、獲得が期待される能力は、学生が受動的な態度でのぞむ教育で育成することができるのでしょうか。また、大学教育で獲得した知識や技能を社会で活用するための、将来にわたって学び続け、生きる力はどのように育成されるのでしょうか。これらへの回答の有力な方法の1つとしてアクティブ・ラーニングがあると本学は判断し、アクティブ・ラーニングを推進する理由としています。

アクティブ・ラーニングとは何か

アクティブ・ラーニングは多義的な概念です。学習法であると同時に教授法でもあると言えるでしょうし、また、その形態面だけなく機能面から捉えることもできるでしょう。今日の大学教育では、教員が「何を教えたか」ではなく、学生が「何ができるようになったか」が重要になっており、この視点から教授法の開発が必要になっています。

本学では、具体的な活動例を示すことで、アクティブ・ラーニングの視点から授業改善を進めることができるように配慮し、アクティブ・ラーニングを以下のように定義しています。

多様な能力※の育成を目指し、「他者とかかわる学び」、「実践的な学び」、「深い学び」を志向した教授・学習法。具体的には次のような活動を含む。

1. 書く、発言する、発表するなどを通じて学修者の考えを他者に伝える活動。
2. 学修者が自身の学修を自覚的にかえりみる省察活動。
3. グループ・ディスカッション、グループ・ワークなどの対話的・双方向的な活動。
4. 問題解決や実体験など実践しながら学修する活動。
5. 上記の他に、多様な能力の育成を促す活動。

※ここでの多様な能力とは、本学の学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げた能力を基本としますが、さらには「学士力」、「学力の3要素」、「社会人基礎力」などが含まれます。

アクティブ・ラーニングの推進に当たって

既に個々の教員によってアクティブ・ラーニングが取り入れられているとは思いますが、今後は組織的な取組が必要になります。2019年度入学生からはパソコン必携化も開始されるなど環境の変化や関連する教育改革も次々に進んでいます。それらの施策とも連携して、全学的にアクティブ・ラーニングを推進することにしています。

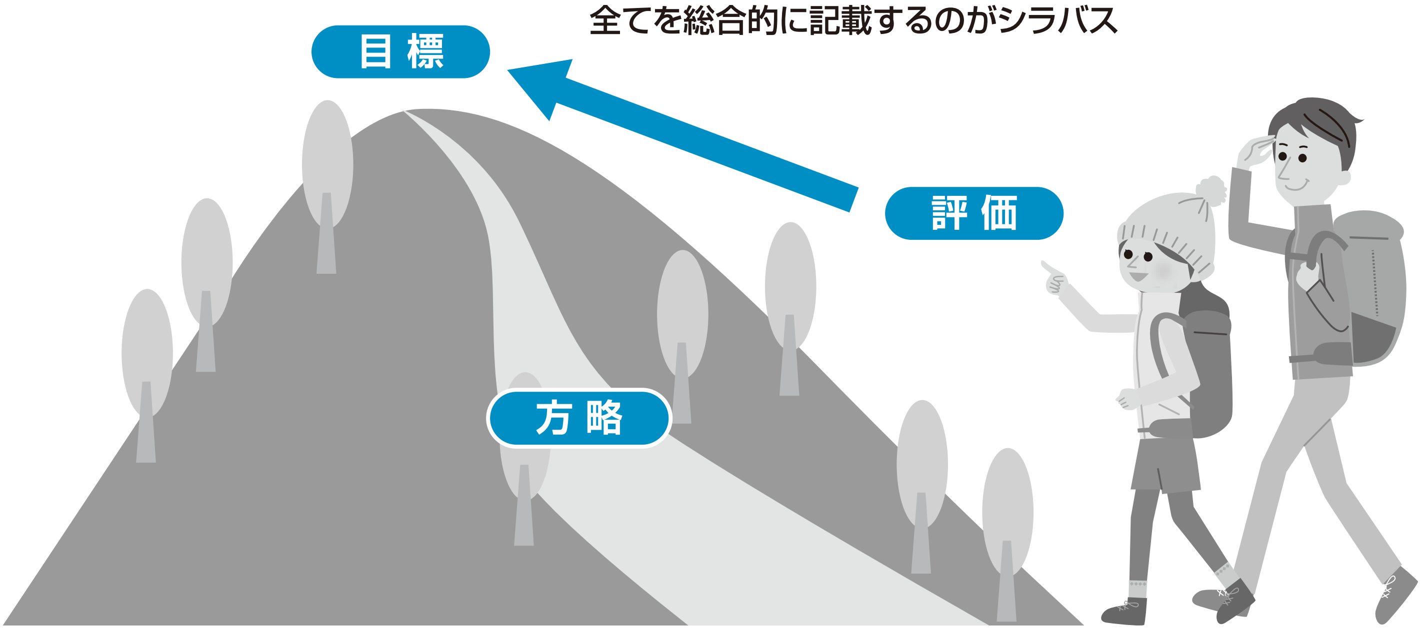
本学の教育改革方針のなかでのアクティブ・ラーニングの位置づけ

他の多くの大学と同様に、本学も様々な教育改善活動を実施しています。アクティブ・ラーニングの推進もその1つですが、アクティブ・ラーニングは教育改善活動全体の制度設計なかで、どのように位置づけられているのでしょうか。

カリキュラムの3要素という考え方があります。教育活動を行う際、そもそも何を目指しどこまで到達するか、つまり「目標」を決める必要があります。その上で、その目標に至るための方法（教授法·学習法）、教員の配置、学習環境の整備などの「方略」を策定および実践し、最終的に実際に目標に到達したのかを「評価」します。この、目標、方略、評価の3つの観点から教育改善の取組を位置づけると以下の表のようになります。

	目標	方略	評価
教育課程	学位授与の方針（ディプロマ·ポリシー（DP））	教育課程の編成·実施方針（カリキュラム·ポリシー（CP））	教育課程レベルのアセスメント·ポリシー
授業科目	到達目標	授業方法 アクティブ·ラーニング 他	成績評価 ルーブリック 他
	DPおよびCPを踏まえて授業科目の学修到達目標を設定。学生が「何ができるようになるか」という視点が重要。	学修到達目標に応じた効果的な授業方法を選択、実施。アクティブ·ラーニングは有効な授業方法。	学修到達目標や授業方法に応じた成績評価の手段が必要。アクティブ·ラーニングの評価法の1つとしてルーブリックは有効。

全てを総合的に記載するのがシラバス



アイスブレイク、アクティブ・ラーニング、発問技法

授業の中にアクティブ･ラーニングを取り入れるには、これまで行ってきた授業をすべて変えるのではなく、授業の一部分で、簡単に導入できる手法から取り入れたりすることから始めるなど、少しずつ取り入れることをおすすめします。

またペアワーク、グループワークなどを授業で実施すると、なかなか学生が参加しないといった問題に直面することがあります。アクティブ･ラーニングを取り入れた授業を始める際には、学生が参加しやすい雰囲気をつくるために、アイスブレイクを行うことが効果的です。アイスブレイクは基本的に初回の授業に行われることが多いですが、学習活動がマンネリ化してきたときや複雑なアクティブ･ラーニングの技法を使うときなど、授業の中間段階でも行うことができます。

そこで今回は簡単に導入できるアイスブレイク、アクティブ･ラーニング、発問の代表的な例を紹介します。

アイスブレイク技法

他者紹介

ペアでの自己紹介とグループでの他己紹介の活動を通して交流を深める技法。まずは、ペアで3分間、5分間など時間を決めてお互いについてインタビューする。授業内容に関する項目をあらかじめ相手に聞く項目の一つとして設定するとよい。次に4人グループになり、インタビューした相手のことを他のメンバーを紹介する。

1 2人ずつのペアをつくり、お互いについてインタビューする。
2 ペア単位で相手を探し、4人グループを作る。
3 インタビューした相手のことを他のメンバーに紹介する。

三つ選んで自己紹介

決められたテーマから三つを選び、そのテーマをもとに学生が自己紹介を行う技法。学生が自己紹介で何を話したらよいか困らないように、あらかじめ15個のテーマを設定する。

1 学生を4～6人のグループに分ける。
2 15個のテーマが記された紙を配付する。
3 学生にその中から、自分が自己紹介で話しやすいテーマを三つ選ばせ、丸で囲ませる。
4 選んだ三つのテーマがメンバーから見えるように紙を示しながら、三つについて1分で自己紹介する。

※テーマの一つに「フリー」を設けておけば、自由に話したい学生にも配慮できる。

アクティブ・ラーニング技法

シンク・ペア・シェア（Think-Pair-Share）

段階的に議論させる技法。文字通り、「考える」「二人組」「共有」の順序で議論させる。あるテーマについてまず1人で考えさせ、隣同士のペアでお互いの考えを共有し、さらに全体で共有する。教室全員の前で意見を述べるのには抵抗があっても、他者と共有した意見は述べやすくなるという効果をもつ。

1 教員が全体に一つの質問をする（あるいは問題を出す）。
2 個人で考える。
3 ペアを組んで互いに答を紹介し合う。違いがある場合にはそれぞれの根拠を明確にする。
あるいは双方の意見を併せて一つの見解にすることを試みる。
4 4人～6人組になり、それぞれのペアで話し合った内容を紹介する。

ピア・インストラクション

教員が提示した課題について、学生同士で回答を考え出せる技法。まず教員が出した課題について学生個人で回答を考えさせた後、隣同士でお互いの回答とその理由について議論をさせ、最後に教員から正答を伝え解説する。意見が分かれそうな問題を用意し、回答が異なる学生同士を組ませ、相手を説得するように促すといった工夫もある。クリッカーや選択肢カードを利用する場合もある。

1. 教員が全体に概念的な問題を回答の選択肢(4〜5択)を提示。
2. 個人で考え、回答を提示する。
3. 近くの2人〜4人で回答とその理由を議論する。
4. もう一度回答をし、教員が正答と解説を行う。

発問について

授業の中にアクティブ·ラーニングを取り入れる上で、発問を効果的に活用できるかが鍵になってきます。発問には様々な役割があり、新たなことを学ぶ際の興味を高める興味喚起の発問、正解があり、知っておくべき内容を問う学習のための発問、深く学ぶため、望ましい知識やスキル獲得を促すために問う支援のための発問、論議を喚起し、思考と欲求を促すために問う本質的な発問などがあります。発問を行う際は、単純な基礎知識を答えさせるものだけでなく、事象を比較させたり、原因を考えさせたりするなど、思考を深めていく発問など場面に応じて使い分けすることで、より効果的に発問を活用することができます。下記に、発問の種類と発問例を紹介します。

発問事例

種類	発問例
基礎知識	「〜とはどのようなものでしょうか」
比較	「〜はどのようなちがいがありますか」
動機や原因	「どのような状況で〜は起きているのでしょうか」
行動	「〜に対して何をすべきでしょうか」
因果関係	「〜は、〜にどのような影響を与えていますか」
発展	「この授業で私が説明したこと以外に〜の原因はありませんか」
仮説	「もし〜ならどうなると思いますか」
優先順位	「〜の中で最も有効な方法はなんでしょうか」
拡張	「〜から他に何か気づきましたか」
焦点化	「〜にどのような問題がありましたか」
揺さぶり	「本当にそれでよいでしょうか」
統括	「〜からどのような教訓が得られますか」

注意点

- **簡潔な表現にすること。**
  学生が何度も確認しないとわからないような長く複雑な発問はよいとは言えません。
- **発問を準備する際は、一度に一つの発問を与えること。**
  学生に様々なことを考えてほしくなり、複数の発問をしてしまうことがありますが、一度に複数の発問を与えると学生の思考は混乱する可能性があります。複数の発問に対して考えさせたい場合には、複数回に分けて発問するよう心掛けてください。

参考文献　中井俊樹編「アクティブラーニング」(玉川大学出版部、2015)

アクティブラーニングについて学ぼう（書籍の紹介）

　アクティブラーニングを取り入れた授業方法を習得するには書籍から学ぶという方法もあります。以下、代表的な手引書をいくつか紹介します。これらは本学の図書館にも置いてあります。

バーバラ・グロス・デイビス『授業の道具箱』（東海大学出版会、2002）

　原書は1993年の出版。カリフォルニア大学バークレー校での実践が基になってます。授業法そのものを細部にわたって解説した本格的なテキストであると同時に、実践的な豊富なノウハウが詰まってます。同著者による先行書『授業をどうする!カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集』もあります。

　大学設置基準でFDが義務化されたのは2008年ですが、遡る1999年には努力義務とされていたました。そこの頃からのロングセラー書です。

溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』（東信堂、2014）

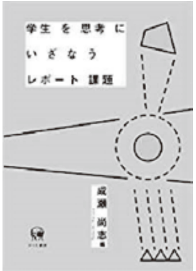
　アクティブラーニングとは何かということに正面から取り組んだ本です。アクティブラーニングの実践的関心から出発しながらも、理論的な解明を目指した専門書となっています。前半はアクティブラーニングの定義、背景、概念を中心に、後半は授業法の概説という構造になってます。

著者は、アクティブラーニングだけでなく、高校・大学から仕事へのトランジション研究でも著名な研究者です。

中井俊樹編『アクティブラーニング』（玉川大学出版部、2015）

　シリーズ大学の教授法のなかの1冊。アクティブラーニングの基本となる知識の習得から実際に授業に取り込む方法まで、15章にわたって網羅的に、また分かりやすく解説してあります。関心のある章（例えば、第15章「大人数授業における実践」）を中心に読むということも可能なように配慮してあります。本の最後には、「アクティブラーニングのための資料」として、様々な技法や用語の紹介、ワークシートやルーブリックの例示など豊富な資料が提供してあります。

成瀬尚志編『学生を思考にいざなうレポート課題』（ひつじ書房、2016）



　大学教育にとって「書く」ことの重要性は今後も変わることはないでしょうし、また、学生にとってレポート課題は悩みの種であり続けるでしょう。本書はレポート課題を軸に授業設計を考えるという珍しいタイプの手引書となっています。レポート論題（教員からの指示文）、授業設計、評価の3つの観点から読み解いてあるのが特徴です。ユニークなところでは、「コピペ」の問題を扱い、剽窃を禁止するということではなく、学生が自ら頭を使ってレポートを書くように仕向ける工夫について言及してあります。

アクティブ・ラーニング推進に向けた取り組み

FDワークショップI

● 開催日:2019年4月6日(土)

大学での指導・教授法、クラス運営等に関する基礎的スキルの定着を目的に、新任教員や若手教員を対象としたワークショップを開催しました。

ワークショップでは、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の実践に向けての講義や総合政策学部坂田教授によるThink-Pair-Share(シンク・ペア・シェア)を取り入れた模擬講義、またペーパータワーなどグループワークを通してアクティブ・ラーニング体験を行いました。

参加者の声

アクティブラーニングは、すでに取り入れた講義を行っている講義担当者においても、これから導入予定の講義担当者においても、手法の選択や、学生の主体性の程度の設定など、悩みは多くあります。また、受講人数によっても能動的に参加させる工夫は異なるでしょう。今回のFD研修会は、模擬講義やグループワークを通して、「学生(受講生)」として参加することで、惹きつける工夫、主体性を持った手法などを感じさせてくれるものとなりました。

自分の気持ちがどこで、どのように動いたか、どのような言葉やアクションに反応したか等、研修での学生(受講生)目線で感じることができたことは、今後の自分の講義、講義の構成に大きな影響を与えてくれるものと思います。

(経済学部 准教授 齊藤 由里恵)

FD講演会

● 開催日:2019年5月29日(水)

授業の工夫、特徴的な教育方法、学生の成長などについて、その可能性や課題に関する情報の共有を図り、教育の質保証・向上につながる機会とすることを目的に、名古屋大学高等教育研究センター中島英博准教授を講師としてお迎えし、本学の教員を対象としたFD講演会を開催しました。講演会では、本学の専任教員249人が聴講し、アクティブ・ラーニングに関する知識を深めました。

参加者の声

「学生たちを能動的に学習に向かわせるため、どんな工夫をしているか」と話しあう時間が多くなっています。今回の講演では、そんな授業を創り出すためのデザイン原則と成功例、あわせて、授業実践の注意点と失敗例までをお聞きすることができました。中でも「学生が自分から答えを創りたくなる、よい答えを知りたくなるような大事な問を持ち込もう」という原則紹介と、「研究者は専門分野にそんな問をたてるセンスがある人たち」との励ましが、とても印象的でした。

講演では学生が自分の考えを修正、拡張していくのに効果的な方法として、学生同士のコミュニケーションや協同問題解決が紹介されました。このような授業では、教員(私)が伝えたくてたまらない「とっておきの答え」を、いつどのように提供するのがよいのか、あらためて講義の役割を考えさせられています。

(工学部 准教授 土屋孝文)

授業改善のためのアンケート結果

実施対象科目	2019年度春学期開講科目　764科目
実 施 期 間	2019年7月8日(月)～7月19日(金)
設　問　数	全学共通質問項目(選択式11問、記述式2問)および担当者任意設問項目2問

【あなた自身に関する質問】

(1)この授業を履修した理由は何か。(複数回答可) (2)この授業1回分(90分間)の受講に対して、事前事後学習(宿題、課題含む)を合計すると、平均してどのくらいの時間をかけたか。(3)自分は、この授業の「学修到達目標」を達成した。(学修到達目標とは、シラバスに記載してあるものをさします) (4)自分は、この授業を通して、新しい知識、技術、能力を得た。(5)自分は、この授業に満足した。

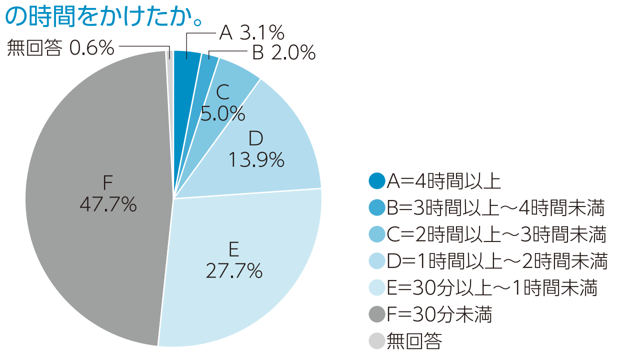
【授業内容・教授方法等に関する質問】

(6)教員の話し方は明瞭だった。(7)教科書、板書、配付資料、視聴覚教材、実演などを通じて、授業の教育効果をあげる工夫がされていた。(8)授業は、概ねシラバスに沿って進められていた。(9)授業は、受講者の理解度を確認しながら進められていた。(10)事前事後学習(宿題、課題含む)に関して、担当教員から指示がなされていた。(11)教員から受講者へのフィードバック(質問への対応、課題へのコメントなど)がなされていた。(12)この授業で良いと思った点について記述してください。(13)この授業で改善した方が良いと思った点について記述してください。

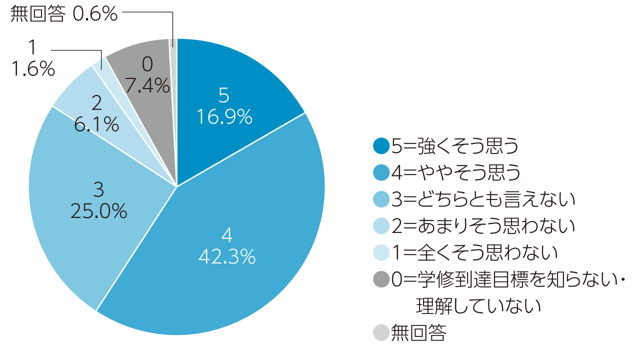
結果について

2019年度春学期から実施方法をマークシートからWEB(MaNaBo)に変更しました。回答率は約68%となり、例年並みの回答率を維持することができました。回答結果については、設問5の授業に関する満足度をはじめ、多くの設問で「強くそう思う」、「ややそう思う」という回答が高い割合を占めており、各教員が授業改善に取り組んでいることがうかがえます。また2018年度から設けた設問2についても、学修時間1時間未満が76%となっており、2018年度よりも少し改善されました。アンケート結果に基づき、各教員が自身の授業を省察し、学部点検担当者の確認を経た省察報告書を、10月中旬以降にMaNaBoで公開する予定です。

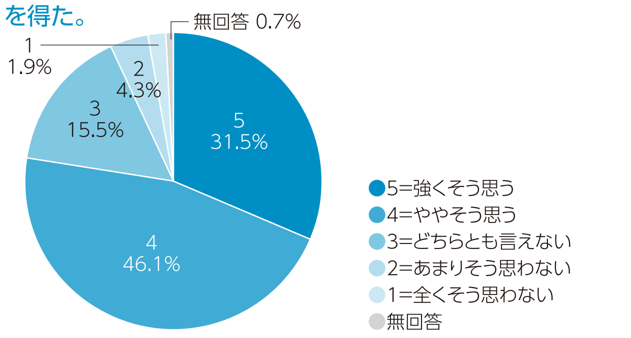
【設問2】この授業1回分(90分間)の受講に対して、事前事後学習(宿題、課題を含む)を合計すると、平均してどのくらいの時間をかけたか。



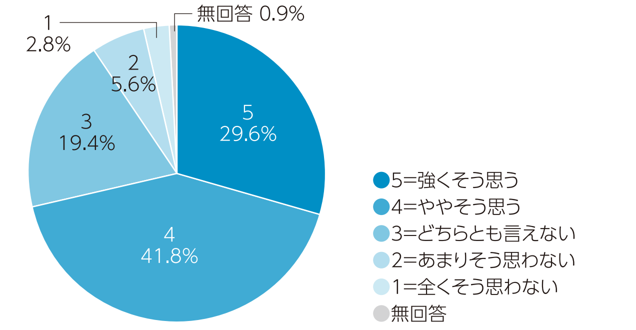
【設問3】自分は、この授業の「学修到達目標」を達成した。(学修到達目標とは、シラバスに記載してあるものをさします)



【設問4】自分は、この授業を通して、新しい知識、技術、能力を得た。



【設問5】自分は、この授業に満足した。



※アンケート集計結果(一部抜粋)

発行:中京大学 教育推進センター　〒466-8666　名古屋市昭和区八事本町101-2
Email: fd-office@ml.chukyo-u.ac.jp　URL: http://www.chukyo-u.ac.jp/information/fd/